俳諧一葉集

一

へ 5
2179
9-1

芭蕉翁發句附合文章茶話俳諧遺語消息也一代之風藻雖不可考乎茲所謂親覩於古書收藏於他庫也悉以舉焉

俳諧一葉集

前後篇九冊

東都中橋北槙町
一具菴藏梓

序

俳諧者猶常貌而中格妙門也世人妄謂一時戲言綺語也豈夫然耶蓋能致知而達理之常變氣之順逆固守自得遊心於太虛則語默作之無有不善故

棄名利而造之靜安可獲焉誠意而為之身脩家齊擧不外乎此矣昔從芭蕉啟正風雲從風靡今雖其流間有淆者泝源者亦不少也屬者社友集錄翁一期所嘯以為小冊以便卷懷可謂夜行珠矣傳曰法不自顯弘之在人湖子其人乎是為序

文政十亥歲回月

仙波僧正書于薝蔔

林中之谷神齋

俳諧一葉集序

花になくうくひすみつにすむ蛙の声をきけは生としいけるものいつれの歌をよまさりけるとのや実にきく人によりては詩と俳諧とにわかつなとまろくしそもし芭蕉庵桃青翁ハ三十路あまりはすくより仏頂禅師につきて参禅しおはしひそかに花月の吟味に俳諧の底をときて伝して七情よく人を禍ひをとゝふまことらかく渾沌を活して作意に古人のことく代々の弊風を轍して古今集の大いての以

歌にありては杜律山家集の様をあたへて貞
享の格事はしめて狂句に絶外の洒落を発し人
情をも述るに寛く文章我記録にそなへて絶に
道の称とはいふなれなる其後生まれ四海にあふる
る丈とくなき縁をなし桃郎とも栩々とも羅す門弟
多国々にみちして其風を唱ふる人幾千といふ
数をしらすこれか志のれとも厥を呑て胃をあらひ
大意に通しされお陰のふれ斗升筲の量を珠
に遂去に生れ師友なとしく此ら積ひ此から

此にひとり古学流とはなのりて祖翁の一話にくち
まさまり捨し物を吟にたよりして学ふにくはしくをえ
をも受るやと発句より消息述評のさけきまで至るまで
ひろく集めて只ひとつ葉の一とはいふにならひて俳諧一
葉集と題し刻されしをとおもすされとかれと訂し
古来に西するを非なり見えておしく村肝をきさ
みさかれし舎を道亭につくられ三年あまりしあふ後
いふ読にひとしかりしに友人坎窩の函底をもとめてさき
全本ならん残えてあるやかゝる時に請まして大事け

よしと費さんよりハ志あらば此心境に入て工夫すれば
これ古人の心法をなさいふらず自然と悟ることに
遊ぶ水下ちりまく然れど所拙をも守ひ一生をえんの利に
あやかりそめすけれれば俳諧を勉で未だ俳諧を
よすあるもの其の本の俳諧をたしなみ給へしとえ表翁
乃詞をとかうて於ちゐの糟粕に誌す

文政丁亥仲秋

四壁菴湖中

凡例

一 発句の部寛文延宝天和時代の分ハ四季ともに
帖のはじめにあつめ貞享元禄の分ハ其好みのごとく此
季題によりて載せ無季の分ハ巻末に出す
一 同輯しき集に見ゆる句或ハ行脚の紀行或ハ俳友の許
に伝へし古書に所見ありといへども和歌にもれしこれを
何れハ考證として季よしの末に載
一 附合の部ハ延宝より元禄までの年歴をもて
次第し其翁一季の流行をしらしむ

一同二月三日或ハ五月七日泉の袍ハ千子集の末ニ載
一同古集大かた寛文中ハ宗房と作り延宝天和ニ到て
桃青或ハ芭蕉とも見ゆ貞享よりハ翁と作り候て
見ゆ候
一文の新古句の頌ハ不猶他ニ越人の此集るを聞つけし
事ゆをさくわる集録の従翁の作者をの物し然
れとも文集ニ洩たるも入ずハみなりに有之
撰者けれハ末帖ニ載
一文混合しきるハ解従諸のたくひのことにゆりくし

紀行なとの中ニ在て粗なる行り精なる行り文拙き
物もあらしく記して故人の意をたゞつ
一遺語の新古祖翁の語ハ多く一時の読ましてまとくなし
校すゝる志のひろし也筆
一同加の書かれみしのく此書ハ甚く付まりの千大
同小異なる私千般さんもけうりあれハ重複なりら
載

俳諧一葉集発句春之部

古学庵佛兮
幻窓湖中 編
坎窩久蔵 校

寛文延宝天和季中
庭訓の往来誰か文庫よりかの書
出て芭蕉桃青翁のもとに
余年を棚へあけてやはらかなる
手や人手とられていかもよき来
園原の栞もかのもちひの読みかれ
かひなんとつくりきたりまた書

もて来つる足ゟ手玉ころゝ玉
於て春ゝ大え哉春と云
之釣岱川
餅を買ふ折詣当原の手枕
季吟勧進吉沃
和泉の谷とふや出や白の八重かすみ
此梅千生き袖香と明川危し
吉野の梅や難波の二年越
梅さくやあちらこちらは京右郎
志は見れ尻もすりぬ妻の羽
梅 椿 若衣うれ女かな
杉風賞翁

さうけより二月中旬を川柳子
古事八そやそろくまさ程よ次郎月
稲荷の妻へつひの扇れよりかゝひり
蓬なすこく白魚やとら八消ぬ頃
石川に鯉生の庵東山店子香流れて
厨んとして芹の飯みそを染川まで
折柄ここれ青泥坊店の芹や花むを
手代の侠とらとらずおおゆ
家鳥魚人の鰐浦路す芹の食
出しまんや墨子芹焼を見てこ粒
さうれて梅ナすて了し風まくれ
梅咲や白の挽木のよふなり

竹内一枝折よそ
垂耳自入梅花一枝のこそさゝね
ゆかしき風や匂ひさくらむ　梅鉢
鉢ならとしら糸とむすびやむすばれ
ふひのん菩提の縁をむすばれ
志て魚の価ゆるしてらしみなされ
菖蒲さく賀茂なる女操よ家
内裡雛人形天皇の御字とかや
名所八佛の内二句
貝よする風のまにまに和歌の浦
姨捨山あれかし月きよすぐ
捨けんや菩提の木枯の後ももして

山吹の露の葉の色のからとも良なるかな
憂方知酒聖貧始覺銭神
花よりも世の風流ぞ食事し
雨降りければ
華厳の滝折て悔しむ山伏かな
常の寂を経らしても繊月
花をそ猿の月も尽しなり鬼薊
ちらし山やお猿しるの色さかり
笑の気をも咲かまかり桜海苔
紅毛も花よ来からで翁
焼桜咲やむ猫のおまんひむ
糸さらしこや猫さきの足もつれ

吹風の尾朝くあるや大さくら

艶なる奴も見ゆや猿若のさゝん

まぎらし千に角く花の風

初瀬まで人しも見ゆるゝ

うかるゝ人やちるをみ山桜

花の頃としも岩角に待うけて

若手の物あ付きや春の緑袋

春風に吹出し笑ふも見る

よしの花や岩三郎かよしの山

てきらふまきしてふ来るや古代酒

初むかしいのち七十五年ほど

情らしや花見るや浅漬ぬめりあ

先組や宜竹か尺八年もの室

桑名の万丸子群集の花見かな

氏もなし生きもよしや岩の枕

随斎の附

やどし飽く行く友かや肩紀浩そもれ

李下芭蕉を贈る

ばせを植てまづ憎む荻の二葉哉

貞享元禄年中

春立や新年古き米五升

庵に住て

いく霜に心ばせをの松かざり

山家逢春

鎮増乃峯に鮮かな丑のとし
伊勢の宮家まて来る千代の春
嵐雪か言ふる正月小袖をきられハ
猶ゆかりに姿かはらぬ錦の春
山の鋒流をしのんて旧友の来りて
酒興しからまえの屋かすて此ゆけ
初の尺ならして
二日にもぬるるハきし氣花の春
あらむ風呂のほりて入れハの佛製の
きさらぎをとても我
嚴寒まし雨紀大か春此庵かかると

京らや木ふ年重ねとかくて
三年ちえしてあれ人いまするなの春
鄙説の景色居に重をむすふ好三
日ほとすて覧田々
大津絵の筆のはし先ハ何佛
人とふぬきや綾のうへしれ梅
重しや様に見をするきのあ
えられ田毎の月ほとしけれ
蓬莱に出てや伊勢の神路
まそしに歩くゆふむ夜も春
古畑に薪摘ゆくきとしも
一とせに一度つかうし薪の斧

蒟蒻干るかれ実の行かの葉哉
風麦亭
まちまちやなる此野山の風
大ら枝やし此寒を引て一かたみ
まちかれや名も知らぬ山の初霞
正月も余み波と近江や閏月
うかひすの笠箭しまる枝うか
お田さうし
黄なる手然ゆる行れそやしけれ
常や梅のうしろ数の旅
しらひすや餅ま農する撫ぬ先
ある人の常の戸と書侍りけるにて

もんしもしつれし手毛ろくたちのとの
ひらり菊まとしおちうつた垣穂
此梅さうなふへて是と云枝なん
あゆもしらひられハかのもとの隣
の梅そてさうし姉とやなさ呼し
奥うしなひて咲つ待るとて
菊まち来れし梅まくらその垣根
伊勢のあ分まし
梳
鳥よふ年れ梅まあてまらう
訪山陌
梅さるしきのかや野そめてなれし
躁咲てよわらゆらは第しきかな

紅梅や天女の衣つゝむ玉すたれ
梅折て様すてかぬる彼一句
山里は万歳遅し梅の花
奈良にて
何古人かの心しらうめの花
卓袋亭月待
月待や楳かたけゆく小山伏
山家
手洟かむおとさへ梅の盛かな
伊賀の山家にいかしといふ物ある出居
もほうかして薪とする石をほふに
本まてあふれ黒色めしてあしき

良あらむの事みえて梨野也これをきた
て田舎にて石炭とて物すくいの手や
侍りし此石のみ焚事ありきん作
めつらし
香ににほへうにほる岡の梅の花
一とせ都の方に旅ねをしける花
まかり御の館に知人をあまた侍りけ
此まちみちのおく天にゆくよく旅
草庵を訪られけれハ
又もとへ藪の中なる梅のはな
伊勢にて
おこらこの一もとゆかし梅の花

網代民部が息雪堂に会て
梅の木に猶やどり木や梅の花
里の子よ梅折残せ牛乃鞭
園女亭
暖簾のおくものゆかし北の梅
乙州が東武行餞別
梅わかな丸子の宿のとろゝ汁
春もやゝけしきとゝのふ月と梅
かぞへ来ぬ屋しきやしきの梅柳
去来ニ許へ亡人のかたへいひつかはす
蒟蒻のさしみもすこし梅の花
何某新八去年の二月身まかりしを

一周忌の法事して父梅丸子が方へ申つかはしける
梅が香にむかしの一字あはれ也
しめうちの門よりのもとゝ山路の花
おもひ立む梅や花のよそごとの
旅まゝの見のうけしものつゝむ
逝その(や)梅 うつくしき木の花く
二月吉日とて是橘が剃髪して医
門に入るを賀す
初午に狐の剃し頭かな
伊勢にて
神垣やおもひもかけず涅槃像

貞享五年さらしなの紀の末伝ふる翁つ
象潟白洲の末を渉りて咲ける花
及ばれぬ所しらしのくはくれる
千歳ものかけかくもなしとおほえ
出るも廻りまれるに似しかの所行
此海の浪を走らせ境界のやすきを照
しはて内外の浮おそれぬをくむあはれ
秋も深はりりけるん侍る
此の木は花とそしられてみほれ給ひけれ
律ぎ八年さ衣更え山風の外

嵯峨山旅宿

陽炎の我肩にたつ紙衣かな

陽炎や柴胡の原の薄曇

伊賀新大仏寺

丈六に陽炎高し石の上

枯芝やゝゝ陽炎の一二寸

野州室の八島にて

糸遊に結びつきたるけふりかな

入かゝる日も糸遊の名残かな

百草や杉の木すゑいろみ草

本草の情あるや生めくまのくさ

雪ゆかりうす塔の芽摘渋

二月堂

水取や氷の僧の沓の音

泊瀬にて

春の夜や籠り人ゆかし堂の隅

春風やきせるくはへて船頭殿

奈良にて

春風や人かへりつる三笠山

笠寺奉納

笠寺やもらぬ窟も春の雨

よし野西行庵二句

凍とけて筆に汲ほす清水哉

春雨の木下につたふ清水哉

なる海や藤を伸す芽の花

赤坂にて

不性さやかき起されし春の雨

春雨や蓑吹かへす川柳

春雨や蜂の巣つたふ屋根の漏

在京寺にて

しらぬ縄に絶える鶯椿

楼題に対して

もろしのしろ柳にならんとて

古川にこびし芽をふくる柳哉

吹よせの蝶の花まるや若葉哉

贈杜国

笠の緒に柳こぼるゝ旅もつれ

絲もなき柳のちらちら

かくのごとき柳はみどりなる梅一の谷
までの間いと近く海にそひてやうやうきれ
ふる汐をあびつゝ行く萩尺のほとり
千本ある松のうちにある中に清く
すさをやみやけれハ
八丸宮ありて尊像梅の兄
播磨に住みける女の花をさゝる
世の中さかりも念仏申す
謹みてありやともつや
本尊七堂伽藍八宗梅
訪山陰
檀の木に花をかけたるぬすむ

游水蝶苑
かうさきの松をもとめ紀すまで
進古人
あるかの中に浸する梅の気
山さくら咲くもの気あつき川
異淵門ものも壺四王天の紫花も
これてやまへまうへある是宿
正汚泉もの西照信西のゝ紀まを
はひし花頂山まりのさやかの香
紅色枯うし錦の林中まし思ひて
てゆきて飛こ
観音の叢尺路つきふの堂

花咲て七日鶴見る麓哉
物外自悟
花に遊ふ虻なくらひそ友雀
静の葉もたしなむ紫の紙
芭蕉
花の雲鐘ハ上野か浅草か
此寺ハ檜木とこの谷の老木の之る
をゆかしきのふハ八重桜にさて鬢ハ生さ
東叡山生涯一樽の為のしかのお
手傳ふハしといひてうして鄙す
賢者の識をうけぬ
さしかも来ぬはうしれ安かすなら

伊賀の上野薬師寺の初会
初桜折しもけふハよき日なり
見わたすも桜の中より初休みかな
景清も花見の座にハ七兵衛
探丸子の別墅
さまさまの事おもひ出す桜かな
瓢竹庵に膝をいれて旅の思ひいと安
かりけれハ
花を宿にはしめ終りや廿日程
同亭より旅立ける
此ほとを花に礼いふわかれ哉
笠のうらに書付ける

芳野にて桜見せうそひの木笠

龍門二句

龍門の花や上戸の土産にせん

酒のみにかたらむかゝる滝の花

桜狩きとくや日々に五里六里

芳野

花さかり山は日ころの朝ほらけ

しはらくハ花の上なる月夜哉

芳尾村にて

花のかけ謡に似たる旅寝かな

大和の国を行脚して葛城の麓を過るに

よもの花ハさかりにて峯ハかすみわたりたる

曙のけしきいとゞ艶なるにかの神のみかた

ち悪しと人の口さかなく世にいひ伝侍れハ

猶見たし花に明ゆく神の顔

支考か東行餞別

此ころ携をよせて五器一具

尾張の門人より濃酒一樽木曽の檜

諸菜一種おくりけるを人しらす

むかしも

飲あけて花いけにせん二升樽

春の夜ハ桜に明てしまひけり

草庵に桃桜あり門人に其角嵐雪あり

両の手に桃と桜や草の餅

東門人

より館とや人々それぞれ花をめぐし

青山の雲まくし探雪か画し行の様

雲もやさをおもしろく妻の花

借る吟飲る

錦の毛みくろなる哉や花の雲

露酒まずすゞしくて

西行の詠とひとしも花の色

息子似ぬ背負ふもかし神さびる

句あくの文よ

しやんしらに者の小松山桜

花山

花の山二丁のほかれハ大悲閣

立身まで深川の旅宿を訪

もえさしさす舟垂れし柳原

きえしもとハなき宿もやすきぬそもを

猶ぬ妻のうけころよ

花や宿ぬるれともふるひの嵐の家

上野のもえすまゐる待乳に人く幕

おさわき物の音小唄の声をさし幕

千代かさしの松葉をよのみて

より五色に捨ハぬ花見ところの家

吉富や花み旅如の拾ひそや

都よくハらみえんまのを桜ちる

鋒きしてもの尽い椿ゆふへつゑれ
山家
野の宮か庵の前休らへてゝは
まりは雨ふり出し桑さくら
歌よみの気をみほし山桜
二尺の岡をあゆみて
うきふれ郷の花や浦の春
浪芋亭
残花のぬるしきらし霧雨のむ
伊賀ぶいは植の殿八重のかみ奉る良の
八重桜の料に附られてうし之侍へ侍れハ
一里そてみふきもちの子の家このや

扇まて涙くむうけや夜さくら
似合しや豆の粉めしで桜ふり
嵐雪嵩木子亭
去年の松花や木深ぶ屋遣り
木のもとに汁も鱠も休らひ行
洒落雪記
四寸より花吹入つの将の池
浪速のみちのく行むく出
若枕かそしはあへし月も味よ
茶手名楼
手しやさくらを艇すもの巻
花の汁吹千かくる丸うへ

上醍醐

高きより中僧あふるゝ山桜

古郷このみの国井に三年の種を
きゝて

春雨や二葉にもえる茄子種

此種とおもひこなさじ唐がらし

芋種や花の盛りに売ありく

木白

そらけふや阿弥陀の桜麻

伏見西岸寺

我衣に伏見の桃の雫せよ

行人ハ鐘つきて咲る桃の花

尚白と浪華へ下る

只一夜桃の咲ける木蔭のれ

古寺の桃に米ふむ女かな

舟あしもやすむ時あり浜の桃

そろけむ桜の花やかなきよ
も心さへ青きのむかしかれハ
夕顔住る庵をおとされる人に譲りて
おぬ仕人あへ妻をも具しむすめ孫を
持る人ありき夜ハ

草の戸も住替る代ぞ雛の家

重三

青柳の泥にしだるゝ汐干かな

おほろへや露ニ咲あてし海苔の跡
先嬌

蠣よりハ海苔をハ老の志るしとて
海苔千里の浜ほとり

海苔汁の手際見せけり浅黄椀

あけぼのや白魚しろきこと一寸

常陸下向ニ江戸を出る送りの人ニ

此海の草葉ニ白魚送ておこせわかの花
坂子同賞

志らうをや黒き目を明く法の網

よし野を出る時

飯貝や雨ニ泊りて田螺聞

古池や蛙飛こむ水の音

蛙子の衣周より膾を啄むかれ
おもふれぬやみつまく猫の恋

田家

麦めしにやつるゝ恋か猫の妻

猫の恋やむとき閨の朧月

膳所へ行人ニ對して

獺の祭見て来よ瀬田のおく

山路来て何やらゆかしすみれ草

悼呂丸

當帰よりあはれハ塚のすみれ草

よく見れハ薺も花咲かきねかな

團角扇子漢ことさむ手

お娘もまさりなるはみなひとれ

菩提山

山寺の悲しさ告よ無患子

接もの手梨の接穂や山ふかき

茶店二句

涼しいけて咲けれ午睡さく女

菜そらけ千も尺白つる雀の南

陳菴の信宗波旅を越れとを

古宗只あそれなるべくや陳この家

京中や難手もつらす喰中家往

みのむらも秋もしぬひとつ外

きく花も上手休ふたしけられ

ひとり喰中の柏みやきしの都

童形もし

父母の志をまりまて縫その夜

やそきけハ物そろしきしの都

堪るりて燒くかすは喰中藍

雅子も都乃なとす嵐の家

燕子画讃

もろこしの紙紙つむ燕哉　蝶

物ゑや白ぬ菜の花るる　蝶

乍木亭

蝶の羽利いく度こゆる塀の屋根

起よし糸夜手きぬめくり餘

画讃

祇山や虹をくゞりて渡りし

西河

あらしとも山かな霧の瀧の枕とし

画讃

山吹や宇治の蜻蛉のゆ涼しさよ

山ふかや鶯まさむ寒き枝の形

大和行脚の时丹波市とかやいふ

處にて日の暮かゝりけるを藤の覚

忠ふく咲くを紙くるとを

草臥て宿かるころや藤の花

笠着て四谷さかり紙子履

峰入や一里ゆくさし小山伏

此翁の句を見る芽舎の画讃

花さく芽紫やさしや神の花家

二条軒

藪椿門は葎のわか葉かな

逢就尚舎

物の名を先とふ荻のわか葉かな

ゆく春に和哥の浦にて追付たり

翁

行春や鳥啼魚の目は泪

田家にて春の暮を惜む

入あみ猿さきらし住まのされ
猿つゐぬ里そ何をとの声ゑの暮

雪湖水楷書
ゆくまくをほの人とまみる

彦讃
まち道て隈の梅をわけゆく

自画自賛

東方にて晩やとしかまの玉
えらやゆかしくいましし　秋のうね
四方のみち菜をさてふもとほの名
投かひくちさへておそ　流津　魚

上野の長
花ケ醗り羽織きつし淡れ精女
狐名かみちみく行を道る
むく起て塚のともおめちひの角

埋光和尚を悼
咲よもかれ折りしうち花のゆふられ
袖よもらし表の蝶の雲は消をとゝみ
まかくのる程よそふての　つくし

梅歌

まこと深く咲しそむる藍
怨顔は霧して鶯の筆の心勝手
まつしりれは
香や咲くや菜や花子ろいきこと白
初恋の香に居る佛頂猫の小夜
をとまる
あふて来て梢さのしまる夜の空

発句夏の歌

寛文延宝より和津井
時やあけ年のまへある保しききに
時に見めく下夏に毛く尾花
に本庵地の月知れ知らしまに
戸の口に宗れきのれ郭公
黒蝶釜とつて好らく往しくきに
志は下まるや往しきすかす手
子規正有の梅乃花さらり
清く生む耳かえ好く郭公
岸流し波ら海やほとしき来
菖蒲生す軒のいくしの鐔譲

更行く荊をつかむ流るゝ竹
蓮子忽似よりや似ぬ身の影
時きゝつゝやるき仮初めかな世の紅
五月の雨や紫の鬢に入ますそ
きみられ千沙物音や月の魚
降る雪や耳をすまする梅の雨
五月雨も洲ふみ出ぬみなれ川
きみかねや能煙付ける青右郎
きみしく牧やせ笠来る佐しも料
こゝも三河むしろ着き夜のかくさ
楼の露や花の影の　安将　通
右和八件の内　二句

秋や浮ん池鹿や秋しる麦々紅
汗まやよし池辺の露山伏
冬の浮千尺とをしや身のきつう浮ん
ゆふ顔の白く柊の浪葉子残帽より
秋風生る名にときまのうけ調して
頭くりられい
いてや霧よふ布たえの蝶衣
雲の汀船底たけ年月の鯉
莫しきをひめゆふや底さくて
落押よりと身はさ笑ふ露子み
開く萩枕下さふ玉玄斎
梢よくはよそのはつ蝶のかく

小夜の中山にて

いのちなりわづかの笠の下すゞみ

不卜の母追善

[illegible]

甲斐の郡内と云所に至る途中の苦吟

馬ぼくぼく我を絵に見る夏野かな

貞享之頃旅中

ひとつ脱でうしろにおひぬ更衣

夏来てもたゞひとつ葉の一葉かな

奈良にて

灌佛の日に生れあふ鹿の子かな

灌仏や皺手合する数珠の音

招提寺

若葉して御目の雫ぬぐはゞや

日光山

あらたふと青葉わかばの日の光

裏見の瀧

しばらくは瀧にこもるや夏のはじめ

おもひ立木曽や四月のさくら狩

甲斐山中二句

山賤の頤閉る葎かな

ゆく駒の麦に慰むやどりかな

青柳しや草餅の穂に出つる翁

逸素門

いさゝかな緒麦咲いけむ草枕

五月十日武府をたち伊勢に赴く

みし川崎まて送り来りて餞別の

句をよみけるへし

麦の穂をたよりにつかむ別れかな

麦の穂や泪に染て啼雲雀

悼大顛和尚

梅恋て卯の花拝む涙かな

其角の母五七日追善

卯の花も母なき宿そ冷しき

このもやこしも梅の枝の山こし

尾張より東武に下る時

牡丹蘂深くわけ出る蜂の名残かな

桃隣新宅自画自賛

寒からぬ露や牡丹の花の蜜

大坂にて

菊に出て奈良と難波は宵月夜

山崎宗鑑屋しき　近衛殿の宗鑑

か姿を見れはかきつはたとあそはし

けるを思ひ出て

ありかたきすかたおかまむ杜若

鳴海知足亭

一本つゝじ我に岩角の杣かけり
帰峯
寒き山風をとりまきては
こぼれんや笠まてさけくて夜羽織
大悟の珠を君　日光法代家勤さを
まふ千庵従ひて宮田が何薬ニ吉
篠の露練るもの付し旅くたれ
黒山萩の花りや風にお筋
沙鹿
江戸まて萩の笛きく木下雲
雲岸ち
木つきも尾ハ被りけ夜木立

行徳庵
先ふめのむ桜の木もあらん香立
別旧友
二十まて千里の東へ行くも森の角
子規鳴くや黒戸の浜
橋や川にみ水寺にけり
珠藻は潮干の浦に二句
江戸の海ちの先千行やあき
ほとゝぎす消ゆく方や島かけて
素尺の瀧
けふふるみの瀧の素がはて
みちみちく一尺の素門同行二人ちか次

此句のをしへを思ひて銭穀生不足
むしろ宝を作る事に雨ふりやすれは
先此句をもとふくにてみれは
前書や字尽の御句ほとくまて
躬次第にて
雅を横するはむつかしけれ郭公
時鳥声横たふや水の上
一声の江に横たふや杜宇
京にても京なつかしや時鳥
嵯峨にて
ほとゝきす大竹藪をもる月夜
時鳥啼や五尺の菖草

さし竿書たる扇に
鳥さしも竿や捨けむほとゝきす
仙臺にて
田や麦や中にも夏の時鳥
あけほのやまた朔日に杜宇
不卜一周忌琴風興行
時鳥鳴音や古き硯箱
ほとゝきすなく〳〵とふそいそかはし
木隠て茶摘も聞や郭公
烏賊売の声まきらはし時鳥
するかの國に入て
駿河路や花たちはなも茶の匂ひ

蒼柳舎

柳のちり青きのふ料理の百

蒼芝ぞやすらひを

とんぼうと様や雨ふれ花ぐもり

白けしや財布の紐の咲つゞき

路杜園

白きてしに羽もく蝶かなしみ鶴

浪慶

海士の家まで見えてやけしの花

戯水亭

雨わしく思ふまゝなみ子満袮

芦雅

田一枚植てたち去柳かな

奥州今の志ら川に出る 二句

翁のむかしのすがたも風の吉

早苗とも余所に見ぬ歟の田

みちのくの余所に見えねし先蘭亭

の跡をつのしきます所に至りて今

は白川もこえぬ躰にて岩瀬郡

早苗年切の芳感を称かの湯園

かす故人を慕ふべし

風流のはじめやおくの田植唄

しのぶの郡鬼子の里といふや文字摺の岩跡

とは方二尺くらいにて岩の若女の

思の石に朱る年両に文字ふるく和山
葉すみそして茂りに立てるそなたのく
よみて今は苔むし切れて石の両ハ分さず
朱ふれハさきる風情も見えて行きしより
うけ昔営さゐりのしけ跡ハ
さまへうる千文や昔のしきの小跡
　尾張の旧文字翁す
世を旅千代つく山田の行衛
　荒田やの亭
紫つけし古の形りや田植酒
眉尺来し人の昔飾布なく昔の面
草の葉をも落つる露　芳林

木曽路の旅思ひ立て大津にとゞまる
　瀬田の螢を見にゆきて
此ほたる田毎の月にくらべ見ん　翁
上林三入亭
螢見や棹郎酔て覚束な
蚊の火をと本ゝの宿や花のやど
秋と詠ミ行し所を尾花とよめし
宗祇も嵯峨の紅葉をむすび一枝を
ましけれ所石の香をかき分ひ白ひを
る所としいえる源氏の作りさま
如く匂ひやる今ハ涼みし所の弔ふ
舞をもかくしつ○人の世の業ふり行しそれ也
芳しや

蝸牛角ふりわけよ須磨明石

許六木曽路ニ赴ク時 二句

うき人の旅にもならへ木曽の蠅

旅人の心にも似よ椎の花

[illegible]の山家

[illegible]

清風亭

這出よかひやか下のひきの聲

竹の子や稚き時の繪のすさみ

小督墳にて

うきふしや竹の子となる人の果

[illegible]深川の庵を[illegible]

鶯や竹の子藪に老を啼

木因亭竹醉日

降らすとも竹植る日はみのと笠

[illegible]

世の人の見付ぬ花や軒の栗

又[illegible]小袖の中[illegible]川松島

[illegible]人を[illegible]

[illegible]

やみの夜や巣をまとはして鳴千鳥

[illegible]

[illegible]

大津湖仙亭

此宿え鏡しらぬ處こゝち
露川とものゝ依念まし見てし
作士隠士崗やゝ寒かりけり
武隈ゆかしき人のゆくや伏谷沼
武隈の松まし
桜より松は二木を三月越
みしらぬ都や謝縁の鏡は耳につく
俗ましいふらんれて五月雨古家
旅寝て見る五日もや旅ねとゆかし
花の都や一株の松し旅寝紅
翁
ゆやん字足て鏡ふ字雑の號

ちよぼ諸行まで大きむ新嫂
病中自詠
髪生えて容顔青し五月雨
さみだれにかくれぬものや瀬田の橋
阿武隈川の水源まし
五月雨は滝降埋む水かさ哉
醫王寺まし
笈も太刀も五月にかざれ紙幟
旅中独さみしさのつゝみ八万より一里
たちよる道の笠やかけし松の露
さみだれ晴つきさてみちもいとはし
まだ花かなくてさきけ覚ても通りぬ

笠しまハいつこ五月のぬかり道

中尊寺にて

さみだれの降残してや光堂

もがみ川 二句

五月雨をあつめてはやし最上川

風の香も南にちかしもがみ川

其の浦や汐みちこえて五月雨

信濃の洗馬

入梅晴のわたくし雨や雲ちぎれ

落柿舎 嵯峨

さみだれや色紙へぎたる壁の跡

五月雨やかいこわづらふ桑の畑

露川へ申付る

さみだれに鳰の浮巣を見にゆかむ

さつき三十日の不二の画にかれるに

目にかゝる時やことさら五月富士

五月の雨風しきりに降て大井川水

出侍りけれハとゞめられて島田に逗

留す如舟如竹なといふ人の許に宿りて 二句

ちさハまだ青葉ながらに茄子汁

五月雨の空吹おとせ大井川

横山やしばし秋なる夜の雨

那須の光明寺にて

夏山に足駄をおがむ首途かな

夏山や松すゞみ一里程
夏山や猿すく里を食時分
紫陽花や蝶々時おくす浴衣
子珊亭うし
紫陽花や藪をし小庵の家淋しき
重行亭うきよ
珍らしや山を出羽の初茄子
翁の住まぬ何うし大垣の旅店を訪
見つらしはかの藪まろみさこのよ
きん花を宿代のむうしろ見ひて
着の宿ハ仮説すきるはの花の縁で
正成之像

鐵肝石心此人之情
ふりすてる涙や楠の露
被て扇ん撰子嗅る石州上
宮館うし
夏草やつはものともか夢の跡
龝生石うし
石の上や夏草赤く実をし
走湯や夏の日のむれ舟こゝろ
清風亭二句
行末は緋帆かゝれし紅の色
須帰るを伴ふして紅のこれ
己下亭

やとりきむ藜の杖ニあらなくし
翁の如し杖むものをうしなひ侍る
ましき憐みて
おろき人ニたよくむとも哀経む
秋かふ人をおもひけれ哀路なれ
うき露をさめしすゝきよこうんとふ
旅ふしの賊しし我をきゆし
稲葉山にて
捨縁もひくゆかし蝉の声
立石寺にて
志川のさや岩ニ志ミ入せみの声
学堂迅速

やかて死ぬけしきハ見えしん蝉の声
鹽竈うしろの像
女の中をうしろよりして山里ニ
さそおたそゝもすみそめの袖
とふ子ニ
団扇もてあふその翁人のうしろ向
素香亭にて
誰をむのみしの夜織る宿ひ秋
ひとの陰ニ米つむ浮ひとれなり
まさかしよひとのかけぬ底もとめん
雲田の李伊の評文の書信ニ
ひるこの河ニ宿かそしきの麻の山

冬のゐや酥て鳥なき蘆の乱
伸ふ鳥千瓢むかて都ひとり
住ける人の舟千隠れて蘆生之佳
る古社を訪て

瓜作る君かあれなとゆふすゝみ

河鹿松波愛えて古き長瓢千瓜北
花をいけて下よ堂法の猿籠を並
て花生けう蘆の雫をと撥面て更けり

瓜の花志川くいつのかるわゆれ芋

岸棒あるのし の手 のまゝ千遍しさ
拾銭米山の松の下納涼して長年の
甦をなくさむほとや

山のけや名を菩りん瓜をうけ

花と露と一度千瓜みさうかれ
行住庵千て発る時

夕千も新まつの千す瓜のそれ

初吉兼あしたやうら香輪千やを堂
吉来らお種えし

新南千ゆて稚く涼し瓜の泥

栃骨解行ふ鉢八才しきつ吉葉
ゝ花よ新して

香千細れ二千割し吉葉瓜

瓜の皮むいさ雲や是蓑砕
如雪亭らし

夜の秋や崩れて冷し冷し細
さし飛嶋見えし日の落る清水かな
岐阜山にて
妹許や古井の清水の先ゆかむ
那須の温泉明神并に八幡宮を
遥かに拝して南部一方にあれまし
湯を拝ちての日の同じ石清水
拝みまるや幽于ひとくさの御かな
江戸 二句
月を見て物言ふ人や江戸の雨
月見にゆかれと萬字の中も江戸の夜
明石秋泊

蜻蛉やその夜のひるも夜の月
手もと廿八鯨かかるぶ月
三の秋やこゝろにかゝる浦の音
夜の月浦浦より出て赤坂や
晋の淵明をしのびやむ
立寄りに住む菊の墓やたのむ影
秋暮の人の住家に對す
山も泉もなき入りや家の雪
井狩氏水楼
夜の夜や湖のさゞ波の上
名月も見るべくと寝ありやの夜を見
竹かんと誓いみさいはず清れに

人しれぬ山の奥にも席を設け
置とはけり
又たぐひ長良の川の鮎鱠
こゝのよ目に見ゆるものハ皆涼しさ
おもしろうてやがて悲しき鵜舟かな
本宮至るら事すのみ残しま冬
家居を歸しき　二句
ひらひらとあぐる扇や雲の峰
葉の音も間をかよふや雨の鼻
枝ふくて安きつくろぬ葉この間
雲の峰いくつ崩れて月の山
六月や峰に雲おく嵐山

夕暮有や舳ハ縄とくも漕　鯨
清瀧や浪にちりこむ青松葉
みな月ハふく病やみの暑さかな
かたられぬ湯殿にぬらす袂かな
松風の落葉か水の音すゞし
石川丈山の像
風かほる羽織ハ襟もつくろはず
芭蕉
年暮ハ人もかゝみて羽織かな
小倉山常寂寺にて
松杉をほめてや風のかをる音
維力亭　二句

さゝなみや風のかをりに拍子
湖やはや川きしを帆かけの峰
蛤に日もさして居る暑かな
終日に千々に形や雲の峰すゞみ
風渓舗斗
わすれずは小松の中山にすゞ先
手をかけてうらをみてみの衣
ようすゞ木の方へ下つゝ川流かな
大和人の小袖もいるや夜の月千
十八楼作
はけしき月に風の音も涼し
清風亭

涼しきを我宿にしてねまるなり
四弥もかのすゞやみの霞にすゞみ
羽黒山にて
ありかたや雪をかほらす南谷
涼しさやほの三か月の羽黒山
文鏡子むかし山の像を賜ひて作られし
南も佛草の墓も涼し木の陰
新庄風流亭
水の奥氷室尋る柳かな
袖の浦の眺望
あつみ山や吹浦かけて夕すゝみ
寺島彦助亭

笑ふなる海に入るゝもみ川

象潟や雨に西施かねふの花

汐越や鶴脛ぬれて海涼し

きさかたの桜ハ波にうつもれて　西行法師
花の上こく海士のつり舟

花の上こくとよみし古き桜も
朽残りて蚶満寺のほとりにありて
浪をひきよせけれは深く入

夕晴や桜に涼む波の花

小鯛さす柳すゝしや海士か軒

川中の根本によしぬすまみれ

窓の浮家納涼として名月楼の跡より
見附のたりけるまて川中に席をもうけて
夜半まて酒のみ飽くひ舞ふ女ハ常地
踊めいての見へしく男ハ羽折長く裏
しく法師老人とも少しいり楠屋舗
浴衣のてしこれまていうえ夏の涼み
彩しるさきまての声を誘ひに

川風や岸の紀笑ふるゆふすゞみ

妙翠亭題田家納涼

飯椀ふくかつら瓢花やゆふすゝみ

雪花亭

涼しさや直に松の枝の形

野水新宅
涼しさハ指図に見ゆる住居哉
東武より上りて人しれず對す
東海の毛臑へつらし床のまみ
晩得亭
涼しさを絵にうつしけり嵯峨の竹
あふくさしたかき上野鯨の膾
大津木節亭にて
秋ちかき心の寄るや四畳半

奉悼
蓬宿出揖
みえかくれ……しのほとゝぎす
長貞亭
海ハ晴て比叡降のこす五月哉
松島
島しや千々にくだけて夏の海
松しまや鶴に身をかれ郭公
野明亭
清瀧の水汲よせて心太
嵯峨の舟
嵐ハち鳴千里一風の綾緑花

秋虫類　杯光敗にゆかしなたのしきや
なくゆすりの口もちれハ
きみされ手宮ハおとかり旅けすき
李青く牛皇被らく石河ふ子し
感人に信州そての山てみつと
みつくやしるの茄りうつき鶏舟水
笔味るうとし
汗の虫手ほふうしくむ水え害

発句秋之部
寛文延宝天和手中
猿ぬめの猫手足しくりたまの秋
秋来うく耳もしるく枕の戸
秋来ぬと妻呼ぶ鹿や庵の波
手学ものうもの加きにての川
月うや塚の一蔵男七夕
七夕ぬれてぬくうるや雨中天
名所八体の内二句
星合の中や碓氷氷龍田川
八幡や下の橋立たえ闕斗
憶む杜

蕣風も吹て昔ハ秋寂するハ経ゥ見て
三ヶ月や秋の夕の後むかしの名
月をとらへんとしめむ掛てもさむしさ
まふしらくむしすれと四人まで
名にしかしして
偲てすゞ月偲ぶ兎も京良空　哥
尺度を八碇経ハ尺里八ほチの秋
六分と余情の二人半茗蕉従を訪れて
古郷の安居をせず
ゆく千里庵に行けるめや秋に秋の経
角数や松くを出船のすゞの取
西巻

軒小町や千本の芒薄破ぬへし
蜷かとかをもりと吹く秋の風
於東晴
松あれや赤芳えいそうえてくぼれ
菊よ荻や露痕せ乱花のあれ
よくそうへ一葉々虫の旅宿して
月を見るへいくむをたびの宿を
桂　男すまれなくくもの月
廿なるもやゆかし三日の月
新ハ天の下てるひめる月の新
宵や月宵に千金の通ひ町
ゑつくや豆腐ならずそうとすれ染

秋のきのやり戸の口やとをり声
こ梓もおもし水生木やまみち鮒
武蔵野や茶村に家を先とし政以云
欲先とすとゆう
名月のむらや五十一ヶ湊
幸しと名月の都や草印山
涼しや江戸まれかれ山の月
木を伐てもとし口奥とやろの月
有　蘭　草　菊　宜　止
識之や眉千稚子うし衣
武蔵野や一寸ほとれ森の声
萩咲ひらや秋風の口らし

文もぬいつはをつゝ火中に
後家の秋物のほそれをとゝめ
宮の飛みそゆくゝし秋のくれ
雨の日や吾町の秋を堺町

茅舍の感

芭蕉野分して盥千雨をきく夜
とくまた声もはのり尺る芦下す乱
ゆれかりく牝鹿もよるや牡かれ鳥
秋に鶉千虫ハ月下の栗を穿
虱菜すまき寝塗も秋や秋の暮
秋のくれ男ハ泪ぬものふれハ
花木槿裸童の日かさし

庭柔や軒端の荻の取ちらし

重陽

さゝつみやはしゆく菊や杉本坊

近江路を通りけるに越の山の

うしろよりふものゝ上のきぬとも

秋さく

剥きとるみすれ裾のひきされ

貞享元禄年中

呼海翁

秋むや海くま内の一みとせ

とく秋や江みなとのかれ坂帳の横

直江津にて

文月や六日も常の夜には似ず

出雲崎にて

荒海や佐渡に横たふ天の川

合歓の木の葉ごしもいとへ星のかげ

東都の母七十あまりて七としの秋七月

七日に下りてまゐるに家業の七経をもて

題とし見せつかふるものゝ七人此詩縁

そのよをかし又七更の絵をかくまひ

七株の萩の手本や星の秋

何のしの御代むかし随分して四季趣

ゝ人乎
七夕やをとこの祝ひ　保　旅
帋雨星
言水は涙しや旅宿や君の上
如童亭主ゝ
七夕や秋をさだむるはじめの夜
當麻寺主ゝ
絵馬のないくつゞく清の松
能の唄のいなりしづやく坂の縄
嵐雪が遍手鏡ならみの旅ハ
釣鳥のえゝはあの葉らくゆるれあり
東耕軒章述

華於海まゝりぬ浜の月の風
閉関
ゆさしの浜や鷹え頭むらす川の堰
鈴虫やこ麻き又私友あつゝ隠
和女角喜暮句
錦のほゝ香れめしらふをとしこ紅
丸寄の葉就ちむる財垂澤の小枝ゟお
年で更みゝ
物青で扇ひをさくつくのれこ風
何ら宿陀ゝはさふを来して
秋深しをあすむけや瓜苗る
粟津の陀ふえ錦果の紅葉

ひやしと顔をふりかへて昼寝哉

寄李白

稲妻をとらへしとるや李の猿猴

宮毅賀

河みやらて稲妻そかゝ川たよりかな

康成識のみさまくくとなる稲大将の墓

とかやいにしまさつらくて

いまれつゝ手折しぬ人のたふとさよ

稲妻や雲の方ゆく五位の声

おほ宮ま寄る秋夜に鶴骨ともよ笛鼓をか

まくら能するやと画て業其の題すく

床かり来よに生恋のほどふれなさと

はぬひて露ふる秋や加の鈴蟲を

枕として頭に置かへてそわつらはぬ

も只此生恋をまさらしもの也し

いふ妻やこの人の家のすゝきの穂

よし野屋行虎ちて

あかとくし試て陰共すゝうちや

画讃

画けの草雑もうつれ松の露

首良すおる

くみちや書付けるひ笠の杏

二人の浦まし

此のうし捨てやくほど石のつゆ

崑崙ハ遠く一万蓬莱方丈八仙の地あり
まの仍り古峰北と掛て蒼天をお
さえ日月の前ゟ雲門をひらくかとも
うふ雲されおもしろして美京ゟ変す
詩人ハと句を尽ゐすす才士文人もこゝを昨
画工も筆を捨さけるより藐姑射
乳巧の神人ゆうさ其詩をよくきを白
も画をよくさる趣の
雲雷れ皆時百象を画しる
霧か雨不二を見ぬよておもしろし
秋海棠西瓜のいろ手咲けり
玉川のまつ下おもしてをさる下

ひよわしと露の絲秀けしや女郎花
くすし何うしの像
むつかしき背中ゟ軸ふて紫蘇揺
富上の吟
そそさる木槿もて育ち冷れそり
富田醫師細川青虎亭
茶欄干いろ花のもろき筆枕
加賀国手入
お縁の長や手け入垣そろ縁海
小松とはふ雲さえて
さほしき名や小松ハ萩すき
萩原や一夜そやどさ山の犬

飲小亭
ぬれてゆく人もをかしや雨の萩
種の浜
浪の間や小貝にまじる萩の塵
いろの浜
小萩ちれますほの小貝小盃
画讃
しら露もこぼさぬ萩のうねりかな
ひとつ家に遊女も寝たり萩と月
翁書言余子の庭なる侍作りしを
見て
風いろやしどろに植し庭の萩

敦賀にて宗流
門に入ハ蕉は匂ひの礼
悦書和尚の陰享やつの杉て
虫を聴す 茶帳 茶みやとり外
茶店にて
茶の花や燈のつまに根むれ
遊女の画讃
枝ふりは折らしてくらる葉はぬ
きりの雨のやうとし葉ぬてすうれ
葉いろうしかのし花おもつれ
代ちれる一本の火を残ても
秋草斧

芭蕉そし首カ尿芋の花乃露

侍者此斗従て山家を訪ふて

暮え夏ハまこと花くもしらずに山路哉

三ヶ月の比それほとわし暮夜の志

知足の牙と雲大寺が新宅を賀す

よし家や夜とろこゝ背戸の栗

仲秋中の二日此宿に遊びて青瓢の題を得

冬の今や秋をいろし瓢の萄

かゝ見の玉をよして

無始より川うりや川の玉あり

多朝山

玉あり多ふて媛塚の冬あり哉

尼妙貞か身まかりけるときに

数まりぬ身とれ世とひそ玉祭なり

蓮池やをしりて世をなう玉まつり里

甲戌の秋大津に侍りしをこのみ此

許より消息きかれ老八旬四里て陶を賀

今をいひかしくもして

家ことれ枕に白髪す葉も年あり

餞骨の讃

夕風や皇桃打て撫子種

もうしまけ秩父屐ぬきつつひ取

許六か逝去

晴角力いつも上手本楽の食

庭にうけんとし句を書そへる画

一女の絵に

秋のいろ女の味噌塩とあつかひけり

去川うきや綾りて翠のきぬしほ

多き宿宵やみさくし法の声

床干ありいひよ子入やきりしほ

刹那し手習すもむきさ聖くほ

右門の秋社にて

むさんやなかふとの下のきり〱す

白髪ぬく枕の下やきり〱す

きひしきや打千のけさる　蕪

草の戸なりに住てそ秋の風情也

けふよりをくれ友たちの方へつかはしける

みの法は音をしめす末は笠は庵

蜻蛉や取つきかねし草の上

故郷まもなくして秋ふる葉法

先の名訛をくとも　しるて四十雀

田中の法花寺にて

莉語や子猪うきしの野の声

田家

かりかけし田面の鶴や里の秋

稲の家ちる標もの雨や鵆かなし

田家酒家

桐の木にうづら鳴なる塀の内

ねぶの間もいそかしや常の峰　鶴

稲すゝめ芦の木たゝけや迦葉

青くてもあるへきものを唐辛子　椒

かくさめて柳も葉汁に見かくし

大風におしても赤し見のかし

木曽塚の旧草に在て膳所の人に対す

草の戸をしれや穂蓼に唐がらし

　楠院軒にて

秋柳ゆりしてなを残をぞ

全翁ちうもし

庵掃てもとや精舎茶椀

画讃

鐘跡や露の来る残暑しー

堅田にて二句

病厂は夜寒に落て旅ねかな

海士の家は小海老にまじるいとゞかな

月見する座に美しき顔もなし

奈良にて

ひいしほや尾花の出しよるの床

ゆくは秋の蔦猶捨つむ一年の宿

修利伽藍や三段起てる衣しほ

枚の行業軒といふ草庵を尋て

粟稗にまづしくもあらぬ草の庵

故人に逢て

冬瓜や互にかはる皃の形

西行谷

芋洗ふ女西行ならハ哥よまむ

山中十景髙瀬漁火

かゞり火に鰍や浪の下むせひ

嵐雪か四国に渡る時

旅鳥二百十日も船支度

みの虫てもしも手火ましのてまれ

吹飛す石ハ浅間の野分哉

三日月やそよやそよりと渡る萩

小夜の中山にて

馬に寝て残夢月遠し茶の烟

神路山にて

三十日月なし千とせの杉を抱嵐

見る影やまた片形も宵月夜

雲をり〳〵人を休る月見かな

いさよひの夜旅立て舟の中に

一夜を語りて暁の空に逢へるかしこ

遊さしもして

ゆく〳〵や二十七夜も三日の月

川舟やよい茶よい酒能月夜

座頭かと人に見られて月見哉

古将監か古実を語りて

月やその鉢の木の日の下おもて

かしま根本寺にて二句

月はやし梢は雨を持ちながら

寺に寝てまこと顔なる月見かな

田家にて二句

賤の子や稲すりかけて月を見る

いもの葉や月待里の焼畑

大胃根成就院にて陶府

何事の見たてにも似ず三かの月

あの中に蒔絵書たし宿の月

姨捨山にて

俤や姨ひとり泣月の友

いざよひもまだ更科の郡かな

善光寺にて

月かげや四門四宗も只ひとつ

仲秋の月は更科の里姨捨山に慰めかね
てなほあはれさの目もはなれず
ながら長月十三夜になりぬ

木曽の痩もまだなほらぬに後の月

浅水の橋をわたる俗にはあさうづといふ
清少納言の橋はとある一条あさむつの
とかゝれしとぞ

あさむつや月見の旅の明ばなれ

月見せよ玉江の蘆を刈ぬ先

湯の尾峠にて

月ことをつゝみうねてやいかの秋

燧山

義仲の寝覚の山か月悲し

氣比の明神

月清し遊行のもてる砂の上

敦賀夜泊

名月や北国日和定なき

濱

月のみか雨に相撲もなかりけり

仲秋の夜つるかの津に泊りぬる物
かたり此海に鐘の沈みて侍る哉
国のかみの海士を入て尋させ給へと龍
頭下さまに落て引揚へきちからもなしと
きゝて

月いつこ鐘ハ沈る海の底

木因亭にて

隠れ家や月と菊とに田三反

斜嶺亭

戸をひらけハ西に山有伊吹といふ花
にもよらす雪にもよらす只是孤山
の徳あり

そのまゝに月もたのまし伊吹山

伊勢の国又玄か宅へとゝめられ侍る比
その妻の男の心にひとしく物毎まめやか

只しら栄ハ旅の心を安くし侍るぬかの日向
ちの妻髪を切て席をまうけられし
心ちや今更にして
月さひよ明智か妻の咄せむ
悼遠流天宥法印
其玉を羽黒へかへす法の月
名月はふたつ過ても瀬田の月
画題
夜うけてゆ月見るや漂み哉
打出の濱にて
置よひや海をむかうほとの宵の闇
阮宅賤二首

殊ゆく月さし入よ浮御堂
安々と出ていさよふ月の雲
正秀亭初会
月代や膝に手を置宵のやと
古寺翫月
月見する座に美しき顔もなし
月見の雑
米くるゝ友を今宵の月の客
義仲寺にて
三井寺の門たゝかはや今日の月
名月や海にむかへは七小町
名月や兒たち並ふ堂の縁

名月や郭径らしむ老干潟
名月や象と筆架のかけ橋し
名月やそこの家へ落る門流坊
清良
名残つゝあゝて霜秋や宣の月
紫の雲さきけハ印や おりゐ衆れとも
去年この時き物みえる此寺ハ
東山に住る僧を訪て 西行上人此
よみ給ひし山家集のうちれより
咲のみほうしやとみのもしくさある
芋庵の物につのりしける
紫の戸に月やそまってほ流坊

石山に詣ける笔
橋村に志の子ハ月の鋳名鎌のまり
旅宿の長秋
こゝのたひ起ても月の七つのふ
深川
名月や門にさし来る潮かしら
桂ハ松風の情を削て住ひた
曾良氏ハ物数寄を俄かに名
月のよそほひを芭蕉庵にもとを
哉より
古き株をもほりにけ芭蕉庵の月
深川の末五本松といふ所に舟をさしく

川上とこの川下や月の友

はきらひえて川つら闇のむしめくり

嵐蘭初七日追善

見しやその七日は墓の三日の月

東順伝

入月の跡は机の四隅哉

岱水亭にて

影待や菊の香のする豆腐串

伊賀の山中にて 二句

名月の花かと見えて綿畠

名月に麓の霧や田の曇

義仲寺にて

こよひ誰よし野の月も十六里

住吉の市に立て

升買て分別かはる月見かな

畦止亭題月下送児

月すむや狐こはがる児の供

其柳亭にて

秋もはやはらつく雨に月の形

名月や池をめぐりて夜もすがら

山寂しや谷の底や宿の月

あの中に蒔絵書たし宿の月

かけはしや先思ひいづ駒むかへ

桟やいのちをからむ蔦かつら

芳野旅泊

櫻あく露の中より坊のつゝ戸
春の深さ小升かりけり櫻かれ
旅の夜ハ旅ねにも袖をしきぬさね
千里の旧里まし
露けや狸を手に絵むしかの秋く

庵牧亭まし
菊植て休らふ木のあしね
紅葉の雲の落て菊もなのうつり
菊の花見そ覚さしめむさる紅葉かね
思ひ忻ハ宿も紅葉もかゝりもまみちね
よし珍まし

法師手を待つ声のふハ何もと思ふ小草
母の白髪と柳のみさ
また〱ハ消ん流て行川わ秋の雲
初茸やまさら数待ぬ秋のつゆ
松よけやしらぬ木葉の風そよ付
松茸やかるれふ作とハ松の翁
茸狩やあふさいるうたの時雨

絶水不楼
露ちる木の実草の実捨てや
木の実の様らき苔の人みた底のね
李内吉本の二人手
萌菊と柳とられしき草の花

氏野守翠亭

里ふりて柿の木持ぬ家もなし

素ふ柿や一口ハ喰ふ猿のつら

望月素濱 休亭

祖父と親孫子ゟ座や梅みのん

梅や侍なれ白子の店さらし

何喰て小家ハ秋の柳このけ

秋来ぬと驚てもるゝや菊の露

草芥の雨

起ゆる菊よのうしろすかたは

左梅亭主

さやくさけれはもちつのし有の菊

葉泥のまま菊さを菊の花をまきの穴

龍山の富をひらきりみれ千海坂

餘れをさまりめて狂吟なまかれ

よそ守狂神ゐ卿手踏のすかやら

あし手みて戌

吹きよひのいろ花このし錦手菊

山中の湯泉にして

山中や菊そたをらぬ湯の匂ひ

ぬ行亭主

痩あしのしろうきむ菊のつみあら

草の花か花てひろくハめのこは

田なかて氏了

稲こきの姥もめでたし菊の花

望田の何かし木既醫師の兄の亭に招
れしにころも菊をたてゝ酒をとまて
うたれける此葉八所の中菊花さす
いと芳しけれハ

蝶も来て酢をすふ菊の鱠かな

九月九日乙州か一樽を携来りけれハ

草の戸や日暮てくれし菊の酒

大坂なる何れやのことしの後の菊

八丁堀にて

菊の花咲や石屋の石の間

大門通りをとふるに

琴箱や古物店の背戸の菊

園女亭にて

しらきくの目にたてゝ見る塵もなし

奈良にて 二句

菊の香や奈良には古き仏達

きくの香やならは幾代の男ぶり

くらかり峠にて

菊の香にくらかり登る節句哉

生玉辺より日をくらして

菊に出て奈良と難波は宵月夜

菊花の讃

折々ハ酢になる菊のさかな哉

江上の破屋をとむらふて　二石
跡さらりとも心す風のこゑむかしの風
秋十とせ却て江都をさす古郷
悚指子
指をゆ人指すゝて秋の風にの身
義郷のこゝろ仙さう秋の風
秋風や藪もはたけも不破の関
身にしみて大根からし秋の風
一茶追善
墳もうごけ我泣声ハ秋の風
年中
赤しと日はつれなくも秋の風

牛部屋に蚊の声よはし秋の風
翁舎鉄寿えし
石山のいしよりしろし秋の風
續桃夭号
桃の木の其葉ちらすな秋の風
中村をとさて
秋の風伊勢の墓原猶凄し
姝ことの吹しも書し栗の毬
座右の銘
ものいへハ唇さむし秋の風
菖秋の葉しきをと
秋風や桐にうごいて蔦の霜

伊勢紀行の跋

西東あはれさおなじ秋の風

悼松倉嵐蘭

秋風に折れて悲しき桑の杖

野水が旅行を送る

見送りのうしろや寂し秋の風

曲翠亭題夜寒

煮麺の下焼たつる夜寒かな

麻宮神前

此松の実生せし代や神の秋

留別

送られつおくりつ果ハ木曽の秋

さまてさく秋より聴ちくひと川旅

種の浜にて

さびしさや須磨に勝たる浜の秋

行脚庵にて

旅寝や富士にかゝふ秋の山

小松木津桐実集行

秋すゞしゆのそれ〳〵末は小松川

旅懐

此秋ハ何で年よる雲に鳥

車庸亭二句

秋の夜を打崩したる咄かな

ゆふよしハ秋も知らてよさみゆく新酒

きらくゝ人も宵寝ハいやしく朝起ハ
せはし
ゆくもしらぬ秋の名残や亭のうち
木国亭うし
死もせぬ旅寝の果よ秋の暮れ
いく秋をみせすまして明暮かくれ々
深川の庵
桃郎の庵寂しさの秋の夕暮
枯枝に鴉のとまりけり秋の暮れ
雪竹の像
こちらむけ我もさびしき秋の暮
所思

此道や行人なしに秋の暮
り秋やおかて引まよふ之有若露字
哈はふきたて取られ行く秋そ
内寄ハ手をさすりておやまの道字を
をこのみ侍りて
たゞさそうれ称しはぬ涕近字
ゆく秋のゐおれの手しや青字柑
芝柏亭うし
秋深き隣ハ何をする人ぞ
清之丸の旅店に於て
松風の軒をめぐって秋くれぬ
行秋や手をひろげたる栗のいが

春評

悼 仙風

手向けり草ハ菫そ仙ころもす

春海長光余花の后としてなむおくる

仕ろきに葬る

河ちりもまつのみをとしらる花ふれ

武蔵野の月の若生や松島の緒

みつほのみれまくるゆくし秋ハ来ぬ

よし 野宿竹庵

現法ふ苔庵ハむかし昔清香

一草庵の席上饗庭をおして

きし香みさひしき味をまするれ

號の後

米のなお付て飯をみあるし

みのきりは衆手も入やそうしれ

等栽ニ書附ひく

名月の見所といはん松島をも

今年暮をすひて

世の中を稲葉ころ一のやの庵

鮭ある新たる一年のこし舟

秋の地や草の中ゆく風の神を

嵐雪手おくる
きひしさをつゝみかねたる桐一葉
名月や雨にもほしき笠ひとつ
秋のくれ窓に亭うる中柱
此比八井伊家の郡に住たまふるゝ射
経六るのなし家にゆふれ給てかれの詞
を待うちの作なりとて手中柱とよ
まの八今も桜井伊家にゆりとそ

発句名る記
寛文延宝て和手升
身の鏡ありけり見えや月の正月
ゆくる雪や犬の延てみ村貝
戸田椿夫文亭
一しろ絃花や降りて小石川
としてい雨傘をさすに提て傾借
犬吹竹ぼや来て絃て小豆食
むつむあてられみれ町のうすまゝ下
石の経て名立ほめなれとみえ
深川名花の集
椿の花浪をまて絹衣

ゆうかしたるやきのふハさのてふくとけ
叡山が釜霞に呼中春り窓し

茅舎買水

湖若く値嵐か烟きらう浮きり
小舟炭や手男ふ人の原さうで
焼よしても焚きと流るむ枚鳥

龍安寺にて

山寺よ京でかも秋ん宵かよひ
白炭やかの浦島か老の袋

張室の院

春すみもさうに宗代のなつかし
雲くのかれ手吹ハ辛章の花哉

浪のもとき更やえまにさうる花
ひきの雲根深き園の葉くのれ

耕月亭にて

雲をかり上戸は鳥やいられ光
時雨さやまくしうて松の雲
ゆうきよしう惜る雲ハ小紋外
夏衆と絢にいふとも家鵜の雲

うまおうれる人の許にて

去ぼれるあまや去ハさこの仏乃の宮の外
室の鏡や烟はむ去むつ不二の雲
雲も君ハ南の枝やまきさうる
みちはく各所の内猶山

山で猫眠りさいふや雪の山
今日の日や荘子の羽打手さき箱
狩衣八帝し呉天に雪を尺にあら寿
雪の竹鶯化るくろを柳とむ
ゆきの鉤ひらり千鮭をかみえり

名所八体の内

松島や雪かゝりけりの松くらう
手代をふる天のうん比ろあしき海
さまれ草葉絞手つまむ手の雪
此ころ枝ありし手の院ありん
乾鮭や何かし原の氏ら人
あつふりなつまりうかる手の雪

一体ら去念一つくむとしのいお

貞享元禄年中

元禄辛酉初冬九日其角菊園に遊
宝隣の宗匠と称せ月の下に句をつけ
侍りてや八世須父釈子と名くみをかけ
菊むかしく好詠宝隣に言ひやう
且ハ展宝隣のためしあまりも仰るゝ
我秋菊を詠して人しとすめり
れうるのまあり妃
菊の一つや庭ゆきれさる庭の庭

相模のめし於はのうきうかれ八王子はく
とまり旅をもしけしに
比海手は雉狩ん哉時雨
花の姿うつくし時雨とはひく
笠も手むすむしろうへて八幡を
手使犬もしるよしすゆ夜の泊り
時雨ゆくや舟の帆張り取付て
錦は奉り時雨さし生原に
人の海へとしめてゆきさく
そら時雨妙の字を秀時雨に
をやこふさへといふ清河のむく
ちのやとはなれたくとも袖を

うたしきておとま里はきやた火人
旅人へとまりよられ青柳時雨
一尾根を出くらす雪は不二の雪
伊賀山は
柳時雨積もふみのとぬしきとし
四里の道すのり
志くるや田の中り株の黒む淀と
美濃金井宮路おり絶るる龍を
作り木は庭をいさめる時雨のれ
島田譯請なり家さまさ
宮のしまりをとふのうするる時雨に
てまとしし時雨の大井川

竹六亭主人
そゝろなる人も手よ袖そろひ也旬
新稲のむ飯てくやきしられけり
山城へ井出のかはづのしられけれ
芋花
人しを聞ゐら腐れ安くとも
文渓亭主人
口切や堺の庭ぞなつかしき
蟷螂や右の肩むかへ鐘の雪
越周主人
志のぶさく杭さ餅ぶりやちらず乱
窓の浪蒼とも ひく

花これ枯てしおもとこぼさず菊のこゑ
荊棘や袖をかまれぬ菜麦の垣
柾の霜て菅そ枯野とをけせる
骨茶や灯とてまけり蝶の初
大根引しばしはやすむ綫
藤蔓手小坊主の手に大根引
消息
口上書 去年しるす去大根
玄角子旅銭そて葉根を賞して
頌文丈章譲詩
よのつねみ大根一つきも喰うれ
箱のうち大根の名更に知し

学者長生の雨をなさるは誠なれ
ともしの詩にあらぬ傑遁
なる人食く好まれ乎あれる
むかし狂栗は才士にあたりとし
かりと不図思ひあらや侍る

狂句 本のもとに汁も膾も桜かな

竹の画讃

木のもとや竹にかくれて桜咲
冬枯や春まで一色に風の竹
冬されの残りて緑なるこの竹
木のもとや影にいくも人の色

耕雪亭お楚すく

本枝に白ひやつけしまくら 花

三河新城の家士菅沼樗堂の宅

にて

木のもとや冬の伝ひ

鳳来寺に籠しけ

風に先ちとよる松の月

高殿の桜咲きるまで

宮人よ香のきちをりを散紫川

角まの雪にゆれる紙の散紫い

大道院殿尊菅沼芽蕗をめでこと

久しきたれにおみえし事を都

しれ残する友まで紙冬一

桜の名残きしぬるふ八夜や一夜く了

あらためしはるをゆく
世かはるゝや枯木の枝の長
大津をとる
三尺の山も拾ひし拾木の案すれ
有の遅きこしつる收照する様忠
をすゝしく
菜のるる游や澤く花もみち
当寺は雪同千代をとゝめされてより
既千百年なる松ふるの人や御堂奉
加の縁子日竹樹ひてみな古石老ふう
とおもふれ木を物あつて殊勝千
覚ゆるゝれハ

百季は事しきを庭の蔭探ねて
是ひまで縁醐天王縁さえおかりし
振らつての春ゆるされしこ是ひまで縁
菊銘頂きし筆しなり御命講
消息
御命縁や御の中ゝれ流玉鉢
讀草蘇
花庭や有もいゝまる虫の聲
気の龍又よるそこえむは桂
金屏の松は古ひや冬龍
猪酒堂
御手の縁もとえひわかる同め一四芳

冬の蜂のくさみをおそれよ生きてもゐる
ふるさとてとなられ
菜の花や田螺の石にくろ気ふり
樗七才示す
旧里を去りて志はしく田舎に名を寄す
らふ人あり家僕何かし松本の某子
名をと告しめ心をいはさりし参りて樗
奴阿段か功をはしらさし陶侃か故奴
をたすふ謙や是は其人をとるへくおもへは
物はそれとあらはれ下位に在りても
上智の人は是をしらむ於志識解
おのむかしあられ侍りしを手の筆をと

さまつへのふれ
先様へ梅をとて後の名とも寒
千川亭に遊ひて
おしし子伊吹をと見てや名の氣
防川亭にて
来るを招く梅子花見る杯端は
越日梅人亭広陸書の関を與ひなき
水仙や白き停子みさをあり
三河より白雪とうちの子二人へ梅
先梅後の名をはへくさ
香匂ひ梅よりさきしし水仙も
さし花る岸の友や名の葉交

此里をはひとりふてゝハ世をうし　院の法
門の巻きを皆此爺の中上まてふり
美しかりし里人のかりに待るを以て
此文にきこゆるもしるし待れ
ともいさゝかしとしお侍らんを侍らに
梅花を紀に咲か見ゆる　浮世の里
ちようきて花入　梅に梅花ぞよ
鶯の鳥や野鶯のいのち白のそる
此下の草庵まし
松葉を焚きて手拭ひすて寄られ
吉田の解まし
寄られて二人旅ねてたのもしき

鶯や鳶つし入りけり新きふき
三河の国鳳来寺に詣る春のあるかよう俳
此題で発しての方より一枝折りて
松原ひろき新如して　旅の宿かな
李一といふ妻の悼
うつきふる蒲団や寄るよ松や濃き
元起和尚よ酒を好まるゝのえしくすて
なりり
冬ごもり寝入るかるかな見へ外
似化ゝ父の追善
袖のいろよくらねて冬しし　鳳嵐
焼鯛の墨菫をきゝし魚の店

葱白く洗ひたてたるさむさ哉

熱田にて

海くれて鴨のこゑほのかに白し

桑名古益亭にて

冬牡丹千鳥よ雪のほとゝぎす

一ひふのくゐあまるし川千鳥

秋さらん八　松風の里　嵯峨野

桜のもとの　笠さして　雪の降日

星崎の闇を見よとや啼千鳥

杜國を訪ひける道すがら

鷹ひとつ見付てうれしいらこ崎

驚手はさみめくし鴨の足

杜國が不幸を伊良古崎に尋て鷹

の聲を折ふし聞て

夢よりもうつゝの鷹ぞたのもしき

嵯峨川清滝にて

すゞみゆくや上手ねるかけほうし

吉野川は秋も海嵐かな

花屋敷にて我身の心をいふ　山家集

秋題にて

一家もてなさぬ菊の秋の月

若竹やすそ梅の田舎の秋の秋

鶴かれる松の秋は秋さえかれ

十二月九日初雪降の折ふし

初雪やきれたる庭を雪のふる
曾良何某此あたり近くかりに
居をトして朝な夕なに訪つ訪る我
くひ物いとなむ時は柴を折くぶる
たすけとなり茶を煮る夜は来りて
軒をたゝく性隠閑をこのむ人にて
まじはり金をたつある夜雪を訪れて
君火をたけよき物見せむ雪丸け
ばせを
初霜や菊冷初る腰の綿
抱月亭にて
市人よ此笠うらむ雪の笠

ゆきみえし雪やかしこの亀
杜国亭にて申けしき人のこゝろまちて
寂待くる暮
雪と雪こよひ師走の名月か
箱根こす人も有らし今朝の雪
ためつけて雪見にまかる紙衣哉
旅人を見る
馬をさへながむる雪の朝哉
深川八貧の中
米買に雪の袋や投頭巾
寒山自画賛
庭掃て雪をわするゝ箒哉

閑居箴

酒の肴ハいらぬ〳〵よその雪

　呼春雑葉言亭にて

京中さしハまさしや雪の雪

　熱田浄海千浪

鹿島より読も清し雪の示

　吉年の借宿を思ひ出て越人の餘り

二人見し雪ハことしも降りけるか

　懐信濃羇旅

雪おもや陸奥の芭蕉の筆の跡

いさゝらハ雪見に轉ふ所まて

　山中子紙を遊ひて

雪の日や千鳥の後は鐘つく經

　元禄己亥奈良大佛再興

ちる雪やいつ大佛に柱立

初雪や松ハ小倍に笈のいろ

林の音の詩人とさんあさきさら

經て我の後志賀の里に後遺結

ありて大津松本の綿打も古

老尾の洋なる行つる飛も経り

出る法の松もなれは

むか待ふ庵に来ては(?)や志賀の雪

　湖水瓢雪

比良三上雪さしわたせ鷺の橋

大雪や淋しくひとり住處の家

三秋を経て深川の艸庵に帰りけれハ
旧友門人日ゝにむつれ来てけのかと
問ハさとく侍る
ともかくもならてや雪の枯尾花
又此かく絵も其の物しされ

小町の画讃
たふとさや雪ふらぬ日も蓑の笠

草菴に在て
木枕のあかやふしぬるやよるの雪

深川大橋半かゝりける時
初雪やかけかゝりたる橋の上

初雪や各仏の筆けなむひかさて

竹の画讃
あこみては雪中竹の寒さかな
流れ行のを見しくつはきの雪
世の中のはしめ武江に至る
おもかけの神も旅のはての手すれ

深川大橋成就せし時
ありかたやいたゝいてふむ橋の霜
秋すゝしや竹にすゝめのうたも
わかしとおもふ浮世の雪

去歳旧友子を送て餘命かなやこのう
雪を詠て堪へ難くかなしく送りけり

穐田り雪の花見るほしさかれ
かゝく(?)ゆむ案山子の袖や形手の雪
残る手も雪や一ツの[?]と捨て尺し
杜若(?)ら庭を弱言
きれハつて薦しまよしみ雪の花
麦生てよむ隙もかやたけまう
蓼の葉みわれて人きくりみさる雪
此(?)ゆはしくて樹木起倍子へい冬の子
いひつのへきよく
くすりのむさしくも雪の枕かな
古き残せと志のひて
雪のうちまそしと吹火桶かな

ゆくの秋の古よりおこる火桶かな
お手もとしまくる人千鈞す
埋火もきのや流のみえる都と
きりくはちまれまる婦や火燵かな
住つのぬ旅のこゝろや置火燵
祝ふの雲ある良の法沙こらふかな
此朝(?)旅館
埋火や聟入そ家のうけほし
五ツむ川菜の子千並ふいろうかな
貝擦箱の鑁(?)
稚なやしらぬ箱は丸坂中
十二月九日一井亭にて

豁よし宗祇の夕月哉
月さうき御覧ハ手洗に紗あれ
河豚汁や鯛もあるのに無分別
何かなす古木奴僕にかしこく醒
のをしへをまる

兄弟のくましみくむやふくとけ
棄おちて熱ひかる熱田にかる
ゆきひよ木ぬ餞鞘うつくし七里あて
乃さわくる翔の田面や宮の西
心さ手供もしてゆくうむ玉ゆき

自画自讃
何のめしき長やあられの檜木笠

石山お石にたはしる霰かな
緒所の花を人し祈ひつ月
あし隙をよ借しるの水通をみてかん
与義人文
ゑしゝぬ府や殉まよき青あしれ

如行亭にて
琵琶行の夜や三絃おひしはつ音
鞍鉄手琵琶きく軒の霰かな
はらみえ鷹ひきおるゆる雉子
前林仁手路祢をかちて
芸嶋の境も見えるくの七ちゆき
納豆きる音志はしやし随うむ

乾鮭も空也の瘦も寒の中
月花の愚に針立ん寒の入
かくれけり師走の海のかいつふり
年くれぬ笠きて草鞋はきなから
自得箴
めでたき人の数にも入む老の暮
画讃
年々や猿にきせたる猿の面
うかしと手よする人や古暦
年忘れ三人よつて喧嘩かな
煤掃や暮ゆく宿の高いひき
年の市線香買に出はや

月雪とのさばりけらし年のくれ
旅寝してみしや浮世の煤はらひ
旅行
煤掃ハ杉の木間の嵐かな
すゝはきハ己か棚つる大工かな
寒鶯の詞
古法しや絵の姿に俗年の暮
ぬす人にあふた夜もあり年の暮
何に此師走の市にゆく　烏
五百九元旅の頌しく
春やこし年やゆきけん小晦日
芭蕉翁の本意ハ風情を師走哉

此郷の主意一とし浪花に觸し玉へる
を手紙に諸國へ觸ら之ぬを
是や其お誂子滞らぬ吉盆子
阿の御靈なお女御兆丸無比
出られ紙もを友すやとしられ
すこし煙火のきしやうに臘月東京都を
立むさて州々新寛にまゐとゆゑらて
人に家をかぞへて季を季に手継
道ありのとし給へしら以年のこれ
此く年やくみりこれ人にふ梅の花
やりの続きて年わすれさるきけんは
始ろいけるかはゆき年のくれ

春雪亭手記

其季以とて雁の吹ぶに出ますに
ふぶに汁庭たゝきうりの年の暮
まるかも三十日ちかし餅の音
海にふかゞて半切の葉を給ふて
江戸の海の年とし物やむ紫一把
くれして餅を餅汁とはゆれ
みに春をえ二尺の七五三を年の暮

学季之記
かちなしハ様家據を崴くのれ

翁よりきゝし話　松島を行きし話

酒のみのこゝろよき人の句に

月花もなくて酒のむひとり哉

貞徳宗鑑守武之画像

三翁は風雅の天工をうけえて心匠を
萬歳に伝ふ此かげに遊ばん人は道の傳
えることあらし哉や

月花の是やまことのあるじ達

題芭蕉

此植の字とし　梢は梅材木に

四山の瓢

物ひとつ瓢はかろき我世かな

布袋画讃

物ほしやふくろの中の月と花

芭蕉

越の新潟にて

海に降る雨や恋しき浮身宿

余所ながらうちもしらぬ里の宿

涼しさや星を漁る火の家

画讃

ちはくし香をや結ぶ柏餅

はしめは文殊としかれと一蕉に

まや粽画讃とゆれハ新正の為衣す岸
餅花やかざしにさせるよめが君
大津の駅ぬすみて行ひけり
梅干にあう子貴ろ行そ疑ふ
辛崎夜雨
琵琶の湖よ跡数の松の律
粟津晴嵐
さぞ晩ふ人の涼しう市の声
矢橋帰帆
夕の月み赤石の浦を帆の数て
比良暮雪
さえく雲白衣の裾比良の雪

石山秋月
汐やこぬ汐みよ比湖秋の月
瀬田夕照
まおかよかさのぬ網の夜り細
堅田落雁
鳥の文かくらの紙よ片便宜
三井晩鐘
気手に花もれハ耳し花の鐘
右八景八宗房の時の吟なりと云
九のとき此者秋市中に住て吟く居を
深川の郊に移して長安古来名利の

地守ゑしとも定まらぬものは行跡のこると
いひけん人の介しそく覚侍る此弟のもとき
なりや
客の庁にも案を出案うくあくの奇
消息
三十里尾張大根のたよりしのれ
画賛
たのむよ寵愛のお祝の残倉
けし炭に薪をかす小船の巣
笄すうつりて
深川や根こしの芭蕉庵あとの
跡ゆゑとふきしこもや籠すもれ

なかに芭蕉庵を遺しいよなみく
はる経や此弟の八十年との　古梢

卜八十